

を希望されない理由を確認したところ、「オキノームは癖にならないかい?」という薬に対しての思いがあることを知った。そのため、患者の気持ちを傾聴しながら、オピオイドの内服方法について患者へ説明し、看護師が患者にレスキューの使用を勧めていくことにした。さらに、医師と相談しながらオピオイド量の調節をしていった。その後、化学療法の効果もあり、NRS は 0 になり夜間の睡眠が得られるようになった。【考 察】 がん患者の痛みの強さをアセスメントしながら、患者の感じている辛さを理解し、がん患者の疼痛コントロールが図れるように関わるのが重要である。今回、オピオイドに対する患者の考え方を知って関わることで、効果的にレスキューを使用することができ、良眠につながったと考える。

5. 患者背景の理解が看護ケアに反映できた事例

ー緩和ケアチームの介入を通してー

鈴木 希, 松井 円, 福岡 祐子

(日高病院)

【はじめに】 がん治療や緩和ケア目的で入院している患者には、緩和ケアチームが介入し病棟スタッフと共に患

者や家族に関わっている。今回、緩和ケアチームが介入したことにより患者の家族関係の理解が深まり、看護ケアに反映できた事例を報告する。【患者紹介】 A 氏, 71 歳, 男性。直腸癌で Miles 手術施行。傍大動脈リンパ節転移を認め化学療法施行したが、ふらつき出現し中止。食欲不振, 下肢の浮腫と疼痛を訴え入院となった。【看護の実際】 食事摂取は良好で医療用麻薬使用で疼痛コントロール良好となった。徐々に全身状態の悪化はしていたが床上は自由に動け、車椅子への移乗も自立していた。A 氏は依存的な面があり自身で行えることも看護師に依頼することが多く、病棟スタッフは徐々に A 氏を避ける気持ちが大きくなり足が遠のいていた。緩和ケアチームが毎日傾聴するうち A 氏の複雑な家族関係が明らかとなった。それが A 氏の看護師への依存的態度に影響していると考え、依存的な依頼に対してできることとできないことをはっきりと伝え対応したところ、A 氏の言動に変化が見られた。【考 察】 緩和ケアチームの関わりにより、病棟スタッフも A 氏の家族関係を把握することができ、依存的な言動の裏にある A 氏の精神的な面に目を向け看護に生かすことができた。